

小原 俊彦（関西学院大学日本語教育センター）
高村 めぐみ（関西学院大学日本語教育センター）
田中 恵子（関西学院大学日本語教育センター）

1. クラス概要

本授業は、日常会話において、フォーマルな表現とカジュアルな表現を使い分けることができるようになることを目的に行われた。授業は1週間に2コマで、『新装版なめらか日本語会話』（富阪容子（1997）、アルク）の1・2・4・5・7課、及び、『聞いて覚える話し方 日本語生中継 初中級編1』（ボイクマン総子・宮谷敦美・小室リー郁子（2006、くろしお出版）（以下、『日本語生中継』）の第1～7課のトピックを取り上げた。主教材としたのは『日本語生中継』のほうである。本コースは3つのクラスで並行して行われた。学生数は各クラス12名ずつであった。

2. 授業内容

授業は全14回で、最初の5回は「会話文法」として『なめらか日本語会話』で縮約形を中心に学習し、6回目以降は『日本語生中継』を学習した。『日本語生中継』の進度は2コマで1課とし、教科書に沿って進めた。1コマ目は前課のクイズ、ウォーミングアップ、聞き取り練習、ディクテーション、ポイントリスニングを行い、2コマ目は重要表現の導入・練習、ロールプレイ準備、ロールプレイを行った。宿題は2課につき1回で、任意のどちらかの課のロールプレイの会話作成とした。

3. 成果と今後の課題

学期終了時の授業アンケートでは、3クラス計36名のうち、「とても満足」が9名、「満足」が19名、「どちらともいえない」が2名であった。このことから、全体的に学生たちの高い満足感がうかがえる。但し、「満足ではない」と回答した学生が1名いることは付記しておきたい。理由としては、「内容的にやや易しい」と感じていたこと、「ロールプレイのみならず、友達の会話をしたかった」、「日本語能力試験向けの勉強もしたかった」ことをあげている。

『日本語生中継』は、発話の機能や言語形式の習得に重点を置いた内容のため、教室内でのロールプレイが主体となっている。そのため、教室外での発話機会に備えた訓練としては一定の意味を持つものではあるが、学生が自身の思考を深め、それを日本語で表現するような、思考力が必要な学習の時は、副教材の併用についても検討する余地がある。今後、会話クラスのコアの目標をどう定めるかも合わせて考えたい。